

断酒 みどりの友

発行所 呉みどり断酒会
事務局
呉市 押 込 5-12-25
渡部 憲方
郵便番号 737-0915
電 話 33-5571
発行人 渡部 憲
編集代表 石橋 剛
印 刷 松広印刷機



開通した東広島・呉道路



「自暴自棄の酒」

常任理事 佐伯 忠

私が酒を飲み始めたのは、就職先である海上自衛隊に入ってからだ。その頃の自衛隊は男性社会で、仕事の打ち上げ、忘年会、暑気払い等、飲む機会に事欠かなかった。それには何時も参加しており、幾ら飲んでも酔わない・崩れない先輩に憧れ、今なら馬鹿な事と思うが、飲酒訓練に励んで二十代後半には「佐伯はなんぼ飲んででも酔わんし崩れんのオ」という言葉が職場の中で聞こえるのが嬉しかった。四十歳を超える頃、職場での立場も中間管理者として重要な仕事を任されたが、自分の処理能力を超えており対処出来なくなり、そのストレスを酒で誤摩化し、変な飲み方へと変わって行った。その頃は、酒で誤摩化しながら仕事は何とか熟していたが、異常飲酒になったのは、父や母が亡くなって一人になってからだ。平成十三年に母が他界し、父と二人暮らしが始まった。この頃から多量飲酒が始まり、酔っては父に職場での愚痴を毎日のように溢していたが、父は嫌な顔ひとつせず聞いてくれ「人様に迷惑だけは

掛けるなよ」と何時も言っていて、言もしてくれる厳格な父だった。そんな父が平成十六年正月、体調を崩し呉共済病院に一ヶ月入院となった。退院後、家に連れて帰ったが、父の言動・表情の変わりようにびっくりした。歩行困難のうえ、認知症になっていたのだ。認知症が酷くなって行く父の介護と仕事の両立は、今思い出しても筆舌では表せないほど苛酷な毎日だった。そんな父も寝たきりになり、同年の六月に亡くなった。一人になった私は、父への悔やみの念ばかりが残り、自暴自棄となり、悔やみを打ち消そうと何時も異常飲酒の泥沼の中に居た。度々の異常飲酒から起こす私の異常行動を見兼ねた職場の上司の紹介で呉みどりヶ丘病院に入院した。しかし、一度の入院では断酒の大切さが理解出来ず、四か月後に再入院となった。退院後、再度呉みどり断酒会に繋がりが、例会、県内外の研修会、断酒学校へ積極的に参加してのおかげで断酒が続いている。今後も、例会出席・一日断酒をモットーに生活して行きたい。

創立四十八周年記念例会 体験発表表



加藤 勝美
(アメリシスト)

皆さん、こんばんは。呉みどり断酒会アメリシスト・加藤勝美です。何時もお世話になっております。

本日は、呉みどり断酒会創立48周年記念例会、誠におめでとうございます。この様な記念例会の場において、体験発表をさせて頂きまして誠にありがとうございます。

早速ですが、体験発表に移らせて頂きます。私は昭和26年9月5日、沖縄県糸満市にて、父・次郎、母・チエ子の長女として、この世に生を受けました。一人っ子ということで、両親からは過保護に育てられました。しかし、私自身は近所の兄弟の多い家族がとても羨ましく、子供ながらに淋しい思いをすることもありました。

物心がついた頃、家庭の事情に

より、実の母は家を出ました。その後、父親が再婚をしたため、義理の母が私達姉妹の面倒をみてくれました。義理の母には四人の連れ子があり、私は最初は戸惑いを感じましたが、両親は私達を実の姉妹のように分け隔てなく育ててくれました。私の父は、よくお酒を飲む人でした。お酒を飲んでも口数の少ない人で、一人で黙ってお酒を飲む姿を今でもよく覚えてます。私の実家は市場の中で商売をしてました。幼少期は景気も良く、何不自由すること無くとも

我儘に育ちました。口数の少ない私の優しい父は、私には何ひとつ注意はしなかったと思います。16歳の頃には非行に走り、家出を繰り返しました。生活費を稼ぐため、沖縄のスナックでアルバイトを始めたのが切っ掛けでお酒を飲むようになりまして。それまでは自ら多量のお酒を飲む事はあり

ませんでしたが、その頃から自分

自身がかなりの量を飲める事を知り、少し有頂天になっていたのだと思います。その後、一度目の結婚をし、女の子を授かりましたが、夫との喧嘩も絶えず、離婚をしました。娘の面倒は両親が見てくれており、それを良いことに私は、遊びに明け暮れていました。そのお酒が、その後私の人生に大きな影響を及ぼすことになる時は當時は考えもしませんでした。

長い間多量のお酒を飲み、沢山の迷惑を掛け続け、二十数年前に再婚をして生活を共にしていた夫と二人、福祉の方からの助けにより保護して頂いた事が切っ掛けで、当院の初入院となりました。

当時、夫は異常飲酒により身体が全く動かない状態でした。それでも「お酒をくれ!!」と訴える

夫に私は紙オムツをあて、お酒を飲ませていました。私自身、身体こそは丈夫でしたが、長年にわたる異常飲酒で精神的にはポロポロでした。そのため、飲ませてはならないほどの身体になっている夫にまでお酒を飲ませるといふ、妻として、人として絶対にやってはならない行為を続けてしまいました。今でも、その行為を本当に悔

やんでいます。

平成17年、当院の五病棟を退院し、断酒会の或る友人からの勧めで、呉みどり断酒会に繋がる事ができました。入会して暫くの間は、断酒会の参加は自分自身のため：と思つて前向きに取り組んでいたものの、月日が経つにつれて心の弱さや甘えから気が緩み、会から足が遠ざかる事が度々あり、疾しい思いから人を避けるようになりました。その頃、長年お世話になつている会の友人から「例会出席を怠らないように!!」とよく叱られました。私は彼女の声掛けを素直に聞き入れることが出来ず、反抗し続けました。そして、会の多くの先輩や仲間から声を掛けて頂いても、感謝するどころか耳を傾ける事すら出来なくなっていました。

平成20年5月、当院の五病棟で寝たきりの入院生活を送っていた夫が急死しました。夫の入院中、私はデイケアセンターの生活を送る合間に夫の食事介助に通つていましたが、何時もと変わりなく介助をしていた時、夫は突然状態が悪くなり、皆様の懸命な救命処置の甲斐もなく、そのまま帰らぬ人

となつてしまいました。その時の私は夫の死を受け止める事が出来ず、とても落ち込み苦しみました。「何故、私だけが辛く、悲しい思いをしなければならぬのか…!!」という思いで一杯でした。お酒を飲んでいく頃と同じような暗く、卑屈な心になっていました。

夫が亡くなった日、呉みどり断酒会の水曜例会があり、私は独りになるのがとても怖くなり、暗い気持ちのままでありましたが、会場に向かいました。今思えば、その例会出席のお蔭で温かい声を頂き、辛く悲しい思いであつてもお酒に逃げることも無く、今この場でこうして体験発表をさせて頂けるのだと、感謝の思いで一杯です。周りの方々の支えがなければ、今の私はなかつたと思います。

夫の死の悲しみを乗り越え、その後もみどり断酒会に繋がつてはいたものの、なかなか前向きな姿勢が長続きせず、また例会も休みがちになりました。前と同じく、周りの方々に声を掛けて頂いても、どんなに温かい言葉で誘つて頂いても全く耳を傾けない私に戻つていました。当然のように生活も荒れて行き、健康状態も悪くなり、



心の乱れから大きな問題行動も起こしました。当時の私の心の中には「どうせ、私は一人ぼっち…!!。一人ぼっちならば、もうどうでもいい…。好き勝手な生活をして誰も誰にも関係ない…」という卑屈な考えがありました。心が荒れ「今まで一人で生きて来たようであつても、実は沢山の人に見守られてる。支えられて私は生きてるのだ…!!」という事をすっかり忘れ、飲酒時代と同じように自分自身を完全に見失つていたのだと思えます。

今まで幼少期からずっと長い間、周りの人達に心配や迷惑を掛け続けて来たこと。両親からも逃げ続け、その他多くの肉親や友人を裏

切り続けて来た事は、これから先の人生の中でも決して忘れてはならないと思えます。そして、こんな私を見捨てる事なく、何時も温かく御指導して下さいる院長先生には、これからもお元気で、時には厳しく、温かく見守つて頂きたいと思つております。

お酒で失つてしまった大切な人や大切な物は計り知れません。お酒に溺れた生活がなければ両親、両親の元に置いたままでいる一人娘、友人達、そして、何より夫の命もこんなに早く失う事は無かつたと思えます。失つた人、失つた物、失つた信用、私一人ではなかなか取り戻せませんが、断酒会の皆様のお蔭で、どうにか落ち着いた穏やかな生活を取り戻し、先輩、後輩、友人など、これから大切にしていきたいと思える温かい仲間も出来ました。

そして、今、断酒継続8年を過ぎ、こうして自分自身の過去を振り返らせて頂き、何よりも心に思うことは『私の勝手な我儘だけで家を飛び出し、その後、一度も顔を合わす事の無いままにいる両親と、両親の元へ置いたままにいる一人娘に元気で頑張れている間に

一目会いたい…』という願いです。我儘放題で、面倒を掛けようが、苦しめようが、今まで一言も謝ることも出来ないまま、現在に至つています。故郷の沖繩で年をとつた両親が、一人娘の私が人様に迷惑を掛けていないだろうか。元気で暮らしているだろうか。酒に溺れた生活をしているのではないだろうか、今でも心配し続けている事と思えます。両親には酒を止めた姿を見てもらいたいと思つているのですが、まだまだ私の方から、堂々と胸を張つて会いに行ける処まで私自身が立ち直つたという自信が持てないのかも知れません。

私自身がこれから先、会の皆さんの輪の中で過去の自分を反省し、日々前進して行くことが今は大切だと思えます。今は会えずにいる両親と天国で見守つていてくれる夫、淋しい思いをさせているであろう一人娘の存在を何時も忘れず、生きて行くつもりでおります。

最後となりますが、この度はこのような場所で体験発表をさせて頂き、心より感謝しております。そして、院長先生をはじめ、看護職員の皆様には、これからの御指導の程、宜しくお願い致します。



福永 武
(家族)

皆さん、こんばんは。何時もお世話になっております。私は、呉みどり断酒会・家族の福永武です。本日は、呉みどり断酒会創立四十八周年、誠にめでとうございませす。このような記念すべき日に、体験発表の機会を頂き、有り難うございます。

娘は姉妹二人の長女で、結婚して二人の男の子が生まれました。しかし、七年前の夏に一人で戻って来る事態になりました。当時、突然のことだったので家族は戸惑い、何とかならないかと動きまわりましたが、結局数年後に離婚となりました。その後は、子供には年一回運動会で遠くから見ると、会うことも、話すことさえ出来なくなりました。娘は、何とか子供を引き取って一緒に住みたいと思いき、直ぐ仕事を探し始めていました。私達も、娘の生活の立て直しと以前の様に孫に会いたいとの思いで後押しをしました。しかし、特別の技術や技能を持っていないので、

簡単には仕事は見付かりません。その頃、娘は体調を崩して、近所の医院で診てもらったところ、肝臓の数値が異常に高く、即国立呉病院へ入院となりました。今迄、無理をしていたことによるものだから、この際安静にして治療をすれば、気持ちも落ち着くだろうと思いましたが。約一ヶ月間の入院により肝臓の数値も正常に戻り、退院となりました。顔色や表情も良くなつて、これで再出発出来ると思えました。

退院後、近い所に仕事を見付けました。仕事自体は難しいものではなく、職場の環境も良かったようでした。暫く、普通どおり仕事に行つており、一見平穩に過ごしていました。只、最初から話し方に棘があり、僻みっぽく投げやりな話し方をし、以前のように素直でない雰囲気になっていました。家事の手伝っている時など、荒っぽく音を立て雑に扱い、一寸注意をされると直ぐに逃げてしまいました。妻は、娘が今の事態になつたのは、娘が悪かつたと悔やんで、改めて色々教えていました。しかし、この時の娘は素直に聞ける状態ではなく、何事にも反抗的

でした。そうすると、自ずと声を荒げることになり、娘はその都度反発をし、逃げて何もしなくなりました。このような時は殆ど飲んでいたようで、話し方も少し変だと感じていました。職場でも酒を飲んでいいるのではないかと気になつてきました。間もなく、その心配が現実となり、トラブルを起して職場を辞める事になりました。娘は頑として否定していましたが、飲んだ状態で起こしたようでした。

しかし、娘は直ぐに次の職場を探し、今度は介護の仕事で、ヘルパー三級の免許を少し前に貰つていたため、適当な職場だと思つていました。只、前の職場で起こしたトラブルは、人間関係が原因で、飲酒したと思つていましたので、



少し気掛かりでした。介護の対象は人であり、又、お互いチームワークが必要となる職場だったからです。職場は家から遠いので時々車で迎えに行つてました。車に乗る前に、お酒を買つて飲んでいたようで「酒を飲んだのか?？」と聞きました。しかし、平然とした顔で「飲んでいないよ。何故?？」と言いました。そのうち車の中で大きな軀を掻いて眠つていました。その後は、いつもハッキリと飲んだ事が分かる状態であり、酒の量も増えていたようでした。

そのうち、夕方だけでなく、朝から飲んでいた様でした。朝九時頃、職場からの電話で「未だ出勤してないが、どうしたのか?？」とか、ある時は「酔つて寝ているので、連れにきて欲しい!」等言われてきました。連れて帰る時、車の中で寝込んでいる娘の姿を見て、本当に情けなく思いました。家に戻ってきた時は「幼い子供の為にも娘には頑張つてもらわねば!!」と意気込み、張りつめていた気持ち、いつしか萎えてきました。飲酒は連続となり、量は増えてきて大きな声で怒ることが日常になりました。毎晩遅くなつて帰り、

家に着いた時には殆ど泥酔状態で、ハンドバックの口が開いたまま、衣服は汚れ、玄関で座り込み寝込んでいました。酔いが覚めた時「何故、あんなに飲むのか？」と問い詰めますが、本人はいつものように「飲んでいないよ…!!」と平然と応えました。誰が見ても分かることなのに、何故頑強に否定するのか、本当に理解できませんでした。「飲んでいるだろう…!!」「飲んでいない…!!」の繰り返しで、それ以上事態は進みませんでした。近所に聞こえるような大声で怒鳴り、手が出ることもありましたが、それ以上は何も出来ませんでした。後から考えれば、こんなことをしても何の解決にもならず、又、どうすれば良いのか分からず途方に暮れ、家族は精神的にも参っていました。

更にエスカレートし、夜遅く電話で「駅のガード下にいる…!!」との連絡で行くと、娘は道の端に寝転び、傍には口の開いたハンドバックが投げられています。この姿を多くの人が見て通り過ぎた筈で、情けなく怒りにもなりませんでした。直ぐに車に押し込み、国立病院の救急に連れて行きました。何

とかこの状態で診察して貰えないかとの思いでしたが、途中で強く抵抗され結局止めて帰りました。本人は、相変わらず何も悪いとは思っていないようでした。更に、酔って道端に寝転んでいて、お巡りさんに連れて帰って貰うことも起こりました。飲んでいても否定し、隠れて飲むことが日常的になつてきました。

既に、家族は心身共限界でしたが、依然として、何処にどのように相談すれば良いのか分からないままでした。そんな時、次女がインターネットでアルコール依存症について調べていた資料を見て、私達夫婦はさすがの思いで保健所に行き、更に紹介されてみどりヶ丘



後押しをしてくれる父と

病院へ相談に行きました。担当の人から、アルコール依存症について詳しく説明を受けましたが、私達は「ここまでは進んでいない。今の娘は未だ大丈夫だ」と勝手に甘い判断をし、もう少し様子を見ることにしました。『アルコール依存症は進行する病気』ということを知らず、全く認識が甘かったのです。娘が完全なアルコール依存症と認めざるを得なかったのは、それから間もなくでした。職場を解雇され、娘からの連絡で駅まで迎えに行きましたが、既に相

た事のはつきりして治療に結びつき、家族皆が救われる思いでした。最初は通院で済むと思っていました。最低三ヶ月の入院と言われ驚きました。五病棟と一緒に寝ましたが、鍵の掛かる病室は初めてであり、異様な感じがしました。娘が入って、鍵が掛けられる音を聞くと「何か悪いことをしたのではないか…?」との自責の念と「いや、これで良かったのだ…!!」と自分に納得させて病院を出ました。最初の頃面会に行くと、娘は異様な目つきをし、殆ど何も言いませんでした。只、ボソッと「こ

は嫌だ…!!。いつ帰られるの…!!」と言ったのを思い出しました。病棟の先生から、娘の内科的症状と脳のCT写真を見せて頂いて驚き、これほど悪くなっているのが本当に治るのだろうか…と不安でした。待合室の資料を読んで、アルコール依存症の恐ろしさを改めて知りましたが、一方、社会復帰している人の体験を読み希望も出ました。師長さんから院内例会の紹介があり、夫婦で出席しました。しかし、会場に入ると雰囲気は圧倒され、更には発表の内容も衝撃的なものばかりでした。又、家族会

平成二十一年八月六日午後、院長先生に診察して頂くことが出来ました。その時、娘は既に多量に飲んだ上に診察前も飲んだようでした。院長先生からは、即座にアルコール依存症と診断され、入院となりました。これで、今まで悩んでい

では切実な悩みが話されており、不安と同時に共感できる所が多くありました。「酒を止め続けて、社会復帰することは可能である…」との言葉を抛り所に残りの人生を、娘の回復と再起を信じて、例会に続くことにしました。娘は、みどりヶ丘病院の院長先生を初めスタッフの皆様のお蔭と病棟療養生の方々に助けて頂いて、八ヶ月後に退院させて頂きました。

平成二十二年六月三十日、デイケアへの通所と私と一緒に呉みどり断酒会に入会させて頂きました。当初、あまり乗り気でない娘と一緒に例会に行き続けました。会の皆様からの温かい声掛け、研修会や大会への参加の誘い、更に最近では、微力な娘が手助けをして頂きながら役割をさせて頂いたりし、断酒継続四年を迎えることが出来ました。また、娘は院内で作業をさせて頂いており、日常生活のリズムを身に付けながら自立へ向かい、今後起こってくる筈の子供との面会と様々な社会的責任を果たすことが出来るよう、頑張つて貰っています。

今まで酒は「百葉の長」「人間関係の潤滑油」等と言われ、私達は

生活の中で多く関わっていました。私の家でも酒は近くにあり、何時でも飲める状態でした。このような環境の中、娘は何の抵抗もなくお酒に手が出たと思います。その結果で起こしてきた不祥事や異常行動についてを強く攻め、その原因となった酒は、あまり問題にしていなかったように思います。アルコール依存となった状態では、治療が必要であるとの認識を少しでも持つていたならと悔やむ事があります。しかし、後悔しても元には戻らず、厳しい回復の道と、二度と酒には酒には手を出してはならないという戒めを十分教えて頂いてきました。

娘は、未だ断酒継続は僅かですが「一滴の酒を飲んだら終り!!」との教えをしつかり勉強し、身に付けさせて頂いている筈です。もう二度と以前の姿に戻って欲しくありません。「何事も継続する事は力なり!!」をモットーに「例会出席」をし「一日断酒」で、断酒継続をして貰いたいと思つてます。私も寄る年波と病に向き合うこの頃ですが、これからも娘と一緒に皆様の後に付いて参りますので、宜しくお願い致します。



前田 敏美
(本人)

皆さん、こんばんは。呉みどり断酒会の前田敏美と申します。呉みどり断酒会創立四十八周年記念、おめでとうございます。この良き日に体験発表をさせて頂き、渡部会長をはじめ呉みどり断酒会の皆様方には感謝しております。

私は、昭和25年12月27日に九州は福岡の自然豊かな農村に生まれ、現在、64歳になります。今は認知症で入院中の母97歳と、兄弟五人が健在です。幼い頃から、母から「敏美は、何をするか分からんねえ。何か問題を起こすのは、あんただけよ。何、考えてるの?」と言われて育つて来ました。その頃は大袈裟だなあ…と思つていました。

中学卒業後、訓練校に行かせてもらつて、左官さんにでもなるかと、願書を提出。父と朝早く学校に行くと、建築科の先生が近づいて来て「前田君、若いから大工さんになつてみないか?」と誘われ、建築科に変更することに。試験に合格して家に帰り、母に報告する

と、母は飽きれ顔で隣の父に「あんたが付いてて、なんばさせようつとね」と怒つたが、父は笑つていた。訓練校で一年、最優秀賞で卒業。福岡市内の大手会社に優先斡旋されて住込みで見習い四年。入社当初、初対面の社長に向かつて「四年の見習いを頑張れば、家を建てられるようになりますか?」と聞くと、社長は笑いながら「そんな事、聞かれたのは初めてだ」と応えてくれた。「中略」

見習い期間の四年間、色々な出来事があったが修行に励み、見習い期間終わる十九歳の春、社長の計らいで実家を新築する事が出来た。お酒は、見習いに入る十六歳まで一滴も飲んでない。見習いに入つてから、酒の飲み方も修行のうちと飲み始めましたが、飲めない酒を飲むのは大変なことでした。

二十歳の春、道具さえ有れば何とかなるさ…と軽い気持ちで大阪にでも行つてみるかと、お金も持たず、夜には関門トンネルの入口。公衆電話で母に「ちよつと、大阪に行つて来るけんね?」と話す、母は驚いて「敏美ちゃん、どうしたんね。どうしたんね?」と何度も聞き返したが「心配せんでも

良かよ。落ち着いたら、電話するけんね」と切った。後日、謝罪に実家に帰った時、母は「あん時のことは、思い出したくなかつた」と呟くように話し、その顔は何とも言いようもなく淋しそうだった。今思うと、このことだけでも大きな親不幸だったと思う。多分、私自身が気付いて無いだけで、まだまだあるだろうと思う。

大阪に向かう途中、車の燃料が切れ掛かったので、たまたま立ち寄った広島県安芸川尻町で二年。住む家を世話するから、仕事を手伝ってくれと頼まれて二十二歳で竹原市に移った。しかし、あのオイルショックで仕事が途切れて放り出され、飯を食うため、生まれたびかりの乳のみ子のミルク代のため、誰も知らない広島で頭を下げ、頭を下げての仕事探し。それでも、仕事は見付からない。だが、ここは貧乏育ちの有り難さ。耐えに耐え、培われた自然体。そんな時、電気屋の社長さんが「仕事が無いんね？」と声を掛けてくれた。仏様が竹原に居てくれた。その出会いが、その後の歩みを変えた。世話して頂いた新築の家、その一軒が竹原に博多弁の若い二人



組みの大工が居ると口コミで広がり、竹原・東広島と仕事の依頼が来るようになった。人との出会いは偶然でないことを知り、一生懸命持てる最高の技術、相手を思う心で明日へと一歩前を目指す気迫が私を助けてくれたと思ってます。

その後、今は大手住宅メーカーとなった会社の創業当時から頭として看板を背負って来た二十五年。大工人生には悔いはない。酒で崩れたのは自分の責任。酒に崩れるはずのない男の崩れ様は酷いものだった。入院の三ヶ月前、崩れに崩れて、淋しき、悔しき、情けなさが入交じって行く。原因は、手の震え、他に何もない。何とかしなければと思うが、酒は日増しに

責めて来る。鏡に映る自分の惨めな姿を見て、どうでもよくなつて自殺を試みたが出来なかった。我に返ると頭に浮かぶのは、娘・息子、母の事。そして、後始末の事。死にきれない男の行動とは、何も守ることが出来ないやけくその開き直り。入院十日前、スーパーの買い物かごには酒、ウイスキー、焼酎、もう一つには愛犬の餌、食糧品をギッシリ詰め込んで堂々と正面ドア出る。十日間で3回成功。

そんな酒を浴びるほど飲んで過去を忘れようとするが、飲むほどに浮かぶのは、幼い頃から母に言われてた「人に迷惑掛けてはいけないうよ。人を困らせてはいけないうよ」と言う言葉。自らが分つて反発しているのだから何かが起きるのは当然の事。一気に押し潰され、落ちる処まで落ちてやれと思うのが想像の地獄は地獄では無かった。飲酒欲求は手加減はしない。もう限界と疲れ果てても、飲酒欲求に戦いを挑もうとする良心。そんな良心との葛藤が本当の地獄だった。酒害者本人しか分らない生き地獄の生活も終りが来て、入院五日前には、竹原本署の檻の中に居た。「前田さん、昨夜その椅子で何て

言つたか覚えてるねえ...」何も覚えてないと首を横に振ると、急に顔が厳しくなり「あんた、本当に覚えてらんのか...。これ以上飲んだら死ぬるぞ...。前田さん、あんたは昨日、その椅子から立ち上がって泣きながら、こう言つたんだぞ...!。」「中略」本当に覚えてらんのか...と、凄しい迫力。少し間を置き、顔が優しくなつて「もう電話をしてある。少し待つて下さい。私がついて行くから、福祉に行こう」と言い、福祉に行くところの方が居て、何から何まで手続きしてくれて、誰にも知らせず赤十字の車で、このみどりヶ丘病院に導かれました。病院の待合室の長椅子にダンボール箱一つ持つて座り、白い看護師姿を眺めながら、ここは病院なんだ。このどうにもならない身体、何とかしてくれるのではないか。あの何とも言えない安堵感。そして、俺も終わったなあと言う絶望感。今も昨日のようには浮かんて来ます。あの日から、もう五年になりました。

初めての入院、三病棟二病棟、十日目には、一病棟に居た。何が何だか分らずに一ヶ月がすぎた頃、母が心配してるだろうと、何時も

どおり何の気もなしに電話をする
と「どちらさん…?、間違い電話
じゃないですか…?」と聞き慣れ
た母の声。何か変だぞと思ってい
ると、兄に変わり「敏美のことで
寝込んだことのない母が二週間も
寝込んで、やっと起きられるよう
になったばかりだぞ…!」と返事
が返ってきた。アツ、これは大変
なことになっているんだ。酒を
止めなきゃいかん。酒を止めて謝
りに帰ろうと思つた。今まで酒を
止めることなど一度も考えたこと
がなかった私が初めて断酒を考え
始めた切っ掛けでした。

しかし、酒の止め方が分らない。
どうしたら、酒を止められるのだ
ろうか…?と、色々考えた。そこ
で出た答えは、飲まなきゃ良いん
だ。それなら出来ると思つた。飲
めない仲間と治療のお蔭で飲酒欲
求は責めてこない。でも、酒を止
めても誰も分らないだろうと思ひ、
何かを遣つていることの証しとし
て、三十代頃の体形まで絞ること
を目標に決めて行動を始めた。結
局、十ヶ月掛かつて目標を達成。

同時に飲酒欲求も何時の間にか遠
のいていた。だが、この十ヶ月間
の間、帰郷することを忘れていた

わけではない。そろそろ母も私の
帰郷を許してくれるだろうと外泊
許可申請を提出した。

外泊申請を受け取つた看護師長
が確認のため、実家に電話をして
下さつたが、電話に出た母は「帰
つて来られたら困る…」との一言。
看護師長に心配を掛けてまで実行
しては迷惑を掛けることになる。
それから二ヶ月間、考えに考えて
実行に移した。院長先生の講話の
中によく出て来る「子供に会いた
くない親は居ない…!」との言葉
が残つており、私も人の子の親に
なり、そう思うし、母の気持ちも
同じだろうと考えた結果の実行だ。

帰郷し、実家の傍まで着いたが、
最後の一步が踏み出せないでいる。



孫たちに囲まれて

実家は、その角を曲がれば直ぐそ
こだが、暗くなるまで待つことに
した。その間、このまま引き返そ
うか、それとも行くか、決心が揺
らぐ。どうしよう…。その時、院
長先生の顔が浮かんで来る。大き
く息を吸つて、玄関のチャイムを
押した。ガラ・ガラッと引き戸が
開くと、そこには小さくなつた
母の姿があつた。「どうしたとね。
敏美ちゃん、どうして帰つて来た
とね…?」と言つた母の顔には涙
が伝つていた。「母ちゃん、敏美
はちゃんと母ちゃんの目を見て謝
らんと前には進めん。とんでもな
いことをしてしまつて申し訳ない。
反省して自分を立て直し、迷惑を
掛けた人達に償いをしたい…!」

「仏壇に手を合わせて、父ちゃん
や姉ちゃんに謝りたい…」と言つ
たら、人目に付くからと玄関まで
入れてくれ、式台に座り、朝まで
色々なことを話してくれた。「何
で酒がこの世にあるんじやろうか。
酒さえ無ければ、父ちゃんも敏美
も…、何で酒が、この世に酒がこ
の世にあるんじやろうかねえ…?」
と呟くように語る母に言わねば
良かった。黙つて聞いておれば良
かった。「酒が悪いわけじゃない。

敏美の酒の飲み方が悪かつたんよ。
母ちゃん…」と

広島に戻つて一ヶ月後、母から
一通の手紙。8枚もの便箋の中、
最後の一枚の半分が私への手紙。
「…。その広島で二十歳から四十
年の間、多くの人様にお世話にな
つたのだから、その恩返しをしな
さい。自分を早く立て直しなさい。
母は、帰郷のときに話した敏美の
言葉を信じます。そうでなければ、
母が生きている意味がない。その
広島で敏美にしか出来ない事があ
るはず。母が生きている限り、
この土地を踏む事、母は許しませ
ん…!」と言う内容の母の手紙。

最後に母が私に宛てた手紙かも…。
私は、そう感じた。そんな手紙を
書かせたのは私自身、母はどんな
気持ちで書いたのだろうか…?。
あの日から三年。写真なら良い
だろうと思ひ、去年の正月に十三
人の家族が呉の広公園に集まつた
時の写真5枚を大きく引き伸ばし、
渡部会長の想いが伝わる断酒継続
三年の表彰状を同封して母に送る
ことにしました。それから半年、
何の返事も無かつた。母に勘当さ
れたと言え、兄弟とはこんなもの
かと思ひ始めた頃、福岡の三男か

ら電話が掛かつて来ました。《母の認知症が始まり、言う事を聞かないから助けてくれないか》と云うものでした。母の事を知らない私は、生意気にも兄に向つて、「俺は母ちゃんに勘当されているんだぞ。弟や兄貴四人も居て何してんだ。他の三人に頼めや。俺の知ったことじゃない」と電話を切つた。その後、すぐに東京の弟から電話があり「兄貴、今すぐに帰れない？。上の三人の兄貴では手に負えない。母ちゃんを説得出来るのは敏美兄貴だけ。俺も協力するから、助けてくれないか」と。やはり、気の合う弟は頼もしい。「俺に任せろ」と言つてしまった。

家は帰れば何の事も無い。タクシーで病院に連れて行き、診察を待つ車椅子の母、まだ敏美とは気が付いてない。看護師さんが「お母さん誰だか分りますか？？」と聞くと、母は「娘」と応えた。私が車椅子の前に跪くと、母の顔が急に変わり、「敏美が帰つて来た。酒を止めて帰つて来てくれた」と何度も何度も繰り返しながら、私の大きな手を両手でしつかり握りしめ、母の顔は涙が溢れていた。母の手の温もりを感じながら《やはり、母はあんなことを言つても、私が必ず会いに来る。そう信じて頑張つて居たんだ》と思いました。この時ほど、酒を止めて良かったと思つたことはありません。兄と二人で実家に戻り、兄が「見てもらいたいものがある」と云うのでついて行くと、床の間に母に送つた5枚の写真と何故か小さく千切られた三年表彰の賞状の山が並べられていた。兄は「母ちゃんはこれが届いた時、敏美が酒を止めていると凄く喜んでいたんよ。それが次の朝、破つてゴミ箱に捨ててあるのを拾つてココに置いたら、それを母ちゃんがこんなに千切つて部屋中にばら撒いたのを集めるのに大変だった」と話してくれた。兄は分つてないようだったが、母は父と二人の兄、そして私の酒害に苦しめられ続けて来たんだ。それも仕方ない事と私は思い、改めて反省をしました。

広島に帰る車窓からの変つて行く景色を眺めながら、広島の四十年間の出来事、母の若い時の話を思い出しました。そして、帰郷時に見た床の間の千切られた表彰状の山。それは母の酒への思い、憎しみの証だと思うと、止



**第38回愛媛県
ワンナイトセミナー**

平成27年の年明けをきつて1月31日〜2月1日、第38回愛媛県ワンナイトセミナーが愛媛県生涯学習センターで、県内外から二百五十名余りの参加者が集い、盛大に開催された。当会からも会員・家

め続けなければという決意と小片の数だけ例会出席をして来た事を再確認出来た表彰状になりました。本当に有り難うございました。これからも例会出席・一日断酒で素晴らしき断酒人生を目指して社会という大空に向かつて羽ばたいて行きたいと思つていきます。御清聴、有り難うございました。

**断酒継続表彰者
(創立四十八周年記念)**

- ☆一年表彰 高木 宗弘
- ☆ " 澤原 泰幸
- ☆ " 胤森 孝穂
- ☆ " 小川 哲一
- ☆ " 中渡瀬陽一
- ☆三年表彰 吉川 幸江
- ☆ " 山内 鉄平
- ☆ " 島本 辰馬
- ☆五年表彰 鍋山 秀一
- ☆七年表彰 春日世津子
- ☆二十五年表彰 菅田 利男
- ☆四十年表彰 田中 正直

今年も呉みどり断酒会創立四十八周年記念例会が2月7日、我々会員の原点、呉みどりヶ丘病院に於いて小河弘幸・長尾早江子先生を始め、お世話になつた職員の方

達、多くの朋友・療養生の方達に参加して頂いて、盛大に行われた。しかし、今回は長尾澄雄院長先生が体調を崩され、ご臨席して頂けず、少し寂しい記念例会となった。



創立四十八周年記念御祝・御芳名

呉みどりヶ丘病院

- 長尾早江子様 一〇、〇〇〇円
- 山根文子様 五、〇〇〇円
- 田代時弘様 五、〇〇〇円
- 佐藤正明様 三、〇〇〇円
- 住吉秀則様 三、〇〇〇円
- 木原真二様 三、〇〇〇円
- 中村千夏子様 三、〇〇〇円
- 新谷義孝様 三、〇〇〇円
- 中野秀子様 三、〇〇〇円
- 斉藤美紅様 三、〇〇〇円

- 保田有加里様 三、〇〇〇円
- 石川尚子様 三、〇〇〇円
- 田中正直様 三〇、〇〇〇円

寄付者御芳名

(十二月)

- 呉みどりヶ丘病院
- 院長 長尾澄雄様 六〇、〇〇〇円
- 呉 大下和子様 三〇、〇〇〇円
- 呉 堂脇恵美子様 一〇、〇〇〇円
- 呉 渡部 憲様 一〇、〇〇〇円
- 呉 鍋山秀一様 五、〇〇〇円
- (十二月～二月度) 八五〇円

新入会員紹介

- 呉市阿賀北一 一七七一五 岡 雅治 (第一大谷荘)
- 呉市阿賀北一 一七七一六 奥出 由美 (第五大谷荘)
- 呉市蒲刈町大浦五三三七七一 高畑 俊英 (鳴門市文化会館)

断酒継続おめでとう

- ☆一年 中渡瀬陽一 12月15日
- ☆三年 山内 鉄平 1月18日
- ☆〃 島本 辰馬 2月1日

行事予定

○4月12日 第50回中国断酒ブロック (鳥取)大会

併 鳥取県断酒会 創立50周年記念大会 (とりぎん梨花ホール)

○5月9～11日 第71回松村断酒学校 (本山町プラチナセンター)

○5月30日～31日 第21回山口県断酒セミナー (山口県セミナーパーク)

○6月28日 第45回広島県断酒(竹原)大会 併 芸南断酒会 創立30周年記念大会

○7月12日 (竹原市民館) 第50回四国断酒ブロック (徳島・鳴門)大会

○7月18～19日 (鳴門市文化会館) 第14回鳥取県断酒会 一泊研修会

○8月28日～30日 (鳥取県ホテル 大山) 第45回山陰断酒学校 (出雲市斐川町文化会館)

平成二十七年 役員

- 常任相談役(監事) 田中正直
- 会長 渡部 憲
- 副会長兼事務局長 曾根 敏浩
- 副会長兼進行・編集 石橋 剛
- 常任理事(行事) 佐伯 忠
- 理事(事務局) 廣野 幸則
- 理事(会計) 鍋山 秀一
- 理事(編集) 片山 久人
- 理事 福永 里美
- 理事 山内 鉄平
- 理事 高井 行雄
- 理事 住村 博士

平成26年12月～平成27年2月度例会動員数

| 行事名 | 回 | 正会員 | 家族会員 | 賛助会員 | 他会員 | 院内会員 | 7-7-7 | 合計 |
|---------------------|----|-------|------|------|-----|------|-------|-------|
| 土曜例会 | 11 | 386 | 153 | 61 | 134 | 798 | 223 | 1,755 |
| 水曜例会 | 11 | 366 | 146 | | 4 | | | 516 |
| 家族の集い | 3 | | 21 | | | | | 21 |
| ブロック例会 | 2 | 23 | 9 | | | | | 32 |
| 新会員を囲んで | 2 | 24 | 12 | | | | | 36 |
| 院内懇談 | 3 | 5 | | | | | | 5 |
| 特別院内断酒例会 | 2 | 36 | 12 | | | | | 48 |
| 呉みどり断酒会第48回酒なし年感謝会 | 1 | 37 | 16 | | | | | 53 |
| 呉みどりヶ丘病院第45回酒なし年感謝会 | 1 | 25 | 9 | | | | | 34 |
| 平成27年度新年合同初例会 | 1 | 38 | 17 | 9 | 13 | 72 | 27 | 176 |
| 全断連東京セミナー | 1 | 1 | 1 | | | | | 2 |
| 第38回愛媛県ワンナイトセミナー | 1 | 10 | 4 | | | | | 14 |
| 呉みどり断酒会創立48周年記念例会 | 3 | 32 | 18 | 14 | 19 | 72 | 21 | 176 |
| 県連理事会 | 3 | 14 | | | | | | 14 |
| 呉みどり断酒会役員会 | | | 23 | | | | | 23 |
| 合計 | | 1,020 | 418 | 84 | 170 | 942 | 271 | 2,905 |